

## 低温に関する営農技術特別指導指針

平成 15年 7月 24日

北海道農政部

### 低温に関する北海道地方気象情報 (第3号)

平成 15年 7月 18日 14時 40分

札幌管区気象台発表

#### (見出し)

北海道地方では、今後さらに1週間以上、気温が低い状態が続く見込みです。農作物の管理に注意して下さい。

#### (本文)

北海道地方では、6月下旬後半からオホーツク海高気圧の影響で気温の低い状態が続いており、特に7月13日から17日には北部やオホーツク海側で平年より4度から6度低い強い低温となりました。ここ数日間の強い低温からは脱しており、明後日位までは晴れて気温が平年並に上がる地方もありますが、気温が平年より低い状態は今後さらに1週間以上続く見込みです。地元気象台や測候所の発表する気象情報に留意し、農作物の管理に注意して下さい。

#### 6月24日から7月17日までの平均気温と平年差

地点名 平均気温( )平年差( ) 地点名 平均気温( )平年差( )

稚内	14.0	-1.2	羽幌	17.2	-0.4
留萌	16.6	-1.0	旭川	17.5	-1.5
岩見沢	15.9	-2.4	札幌	17.1	-1.8
小樽	16.9	-1.3	倶知安	15.9	-1.8
寿都	15.5	-1.8	江差	17.3	-1.2
北見枝幸	12.3	-2.0	雄武	12.1	-2.0
紋別	12.9	-2.0	網走	13.9	-1.4
函館	15.9	-2.1	室蘭	14.1	-2.3
苫小牧	14.1	-2.1	浦河	13.1	-2.5
広尾	12.6	-1.8	帯広	14.7	-2.1
釧路	12.3	-1.6	根室	10.1	-2.6

最近の低温による農作物の生育の遅れに対応し、適時・適切な営農指導を行うため、関係機関との連携を基に、生育状況や栽培環境を的確に把握するとともに、次の事項に留意し重点的に指導する。

## 第1 水 稲

### 1 生育状況の把握

- (1) 地域別・品種別に生育ステージを把握し、適切な水管理を行う。
- (2) 出穂始に穎花の観察を行い、葯の形態(長さ・色)や花粉の量・充実度を把握する。

### 2 深水管理の徹底

- (1) かんがい水温及び水田水温を測定し、かんがいの参考とする。
- (2) 低温条件下での水の深さは幼穂が常に水の中になるよう、幼穂の伸長に合わせ徐々に深くする。
- (3) 低温条件では冷害危険期が長くなるので、葉耳間長と止葉の出方を観察しながら深水期間を適宜延長する。
- (4) 冷害危険期終了後も低温が予想されるので、水深を下げた後は出穂前の中干しを止め、湛水による保温に努める。

### 3 病害虫の発生予察と適正防除

- (1) カメムシ類やいもち病などの発生予察と適正防除に努める。
- (2) 穎花が小さく割れが多いと予想されるので、カメムシ類による斑点米に注意する。
- (3) 日照が少なく軟弱な生育をしているので、いもち病に注意する。

### 4 出穂後の水管理

- (1) 出穂後は適正な土壌水分維持に努め登熟促進をはかる。
- (2) 出穂・登熟の遅れに伴い落水時期が遅くなるので、かんがい期間の延長など用水確保対策を講じる。

## 第2 小 麦

### 1 高水分小麦収穫時の注意

低温の影響を受け収穫時期が遅くなっている。大雨や長雨の予報が出された場合、高水分でも小麦を収穫することが考えられる。

高水分小麦の収穫に当たっては、収穫損失や損傷粒の発生に十分注意する。また、乾燥まで仮置きする場合は、厚さ5 cm以下に薄く広げ、発熱や異臭の発生に注意し、速やかに乾燥する。

### 2 高水分小麦乾燥時の注意

高水分小麦の乾燥に当たっては、定時的に(特に乾燥初期で水分が30%までは30分毎)子実水分と穀温を計測し、退色粒などの品質低下を招かぬよう熱風温度および乾燥時間を調整する。また、半乾貯留二段乾燥を行い、乾燥機の効率的な利用を図る。

## 第3 ばれいしょ

### 1 病害虫の適正防除

一部地域では既に疫病の発生が確認されている。低温・日照不足によりばれいしょの生育は、軟弱徒長気味のため、多湿に経過する場合や霧がかかりやすい地域では注意し、防除を徹底する。

## 第4 豆 類

### 1 病害虫の適正防除

低温により開花期間が長びくため、多湿条件が続く場合には、灰色かび病に対し適正防除に努める。

## 第5 てんさい

### 1 病害虫の適正防除

病害虫の発生動向に留意し、ほ場観察をきめ細かく行い、適正防除に努める。

## 第6 野 菜

### 1 施設野菜

(1)作物の生育適温を下回る気温で経過する場合、肩換気の調節により、保温に努め、夕方早めに閉めて夜温を確保する。

(2)夕方気温が低下する場合は、ハウス内の相対湿度が高まりモヤが発生する場合がある。灰色かび病や菌核病、べと病等の発生が多くなるので、一度モヤ抜き換気を行うなど、湿度管理を行う。

(3)メロンでは低温に日照不良が重なり、成熟日数が長引く場合発酵果の発生する恐れがあるので、追肥やかん水を控えめにして成熟を促進するとともに、選果にあたっては出荷物に発酵果が混入しないように留意する。

(4)低温により、トマト、ミニトマト、きゅうり等の果菜類に着色や肥大の遅れがみられており、出荷時期や抑制作物との切り替え時期等、当初計画とのずれが生じて来ている。価格や需給動向を検討しながら、計画の修正を行い、安定出荷体制の維持に努める。

### 2 トンネル・露地野菜

(1)低温、多湿で発生が多い、病害対策(ねぎべと病、メロン・すいかの菌核病、アスパラガス斑点病等)の発生動向に注意して適正防除に努める。

(2)にんじんは生育期低温による抽台の発生が予想される。多発した場合、収穫前の抜き取りに努め、抽台根や球の混入を防止するとともに、収穫作業効率化を図る。

(3)メロン、すいか、かぼちゃ等は人工交配による着果確保に努めるとともに、低温による着果不良とばらつきが生じている場合、着果棒立てを励行し、時期別着果量を確認して、適期収穫による品質維持と出荷計画修正等に活用する。

(4)にんじん、だいこん、ごぼう等低温により生育が遅延する品目は、生育、肥大状況調査を行い、選果場操業や出荷計画の修正等に活用する。

## 第7 果 樹

1 りんごは低温が継続すると果実肥大が鈍化してくるので、仕上げ摘果を早期に行い、品種毎の適正着果量を厳守して品質維持に努める。

2 ぶどうも着果制限を厳守し、棚面の日当たり改善に努めるとともに、灰色かび病の発生に留意し、防除に努める。

3 おうとうは低温で収穫期間延長により、樹体の疲れが予想される。雨よけ被覆の早期除去、お礼肥施用、日当たり改善等、適正な収穫後管理に努める。

## 第8 花 き

### 1 受光環境の改善

- (1)ビニールハウス等栽培施設の被覆資材の光線透過率の確保を指導する。
- (2)品目によっては補光や光反射資材等の活用を啓蒙する。
- (3)品目ごとの適正仕立本数を指導する。

### 2 適正な温度及び養水分管理

- (1)品目別に生育ステージに応じた温度・養水分管理を徹底する。
- (2)日射量に応じた昼・夜別の温度管理を徹底する。
- (3)土壌水分は温度や天候により調節するよう指導する。

### 3 切り花類の切り残し対策

- (1)保温資材を点検し、不足の物は事前に準備しておく。
- (2)補助加温をできるように、暖房器等の利用を検討しておく。

### 4 病害虫の適正防除

病害虫の発生動向に留意して、適正防除に努める。

## 第9 飼料作物

### 1 放牧地の草量不足への対応

- (1)気温が低く経過しているため、牧草の伸びが悪く、放牧地の草量は少ない。放牧牛が乾物不足とならないように、放牧地の草量を把握し、不足分をサイレージ等併給粗飼料で確実に補う。
- (2)放牧地は短草利用が基本である。本年一度も掃除刈りを実施していない牧区は早急に実施し、採食可能面積を確保する。
- (3)牧草の葉色が薄くなるなど養分不足が認められる牧区は退牧と同時に施肥する。施肥量は10a 当たり窒素量で2～3kg 程度とする。

### 2 3番草収量の確保

2番草は草伸びが悪く、収量不足が見込まれる。オーチャート主体草地、チモシーの極早生主体草地は2番刈り後、適正量施肥を行い3番草の確保に努める。

### 3 自給飼料確保量及び質の検討

- (1)1番草の収量は雨不足や低温等により低い傾向にあり、地域差、農家間差が大きい。牧草の確保量を把握し、飼養頭数に応じた過不足の検討を行い、不足がある場合は早めに対応する。
- (2)給与粗飼料は必ず飼料分析を行い、飼料設計に生かすとともに、今年産1番草の栄養価の傾向を把握する。
- (3)サイレージ用とうもろこしは、生育が遅れると登熟の遅れにつながる。TDN収量の低下を予測した飼料設計を行い、冬期間の飼料給与計画を検討しておく。